

## 幼児における他者の嫌悪への対処方略 ——感情の明確化が及ぼす影響——

小嶋 佳子

学校教育講座 (心理学)

### Young Children's Knowledge about Strategies in Coping with Other's Disgust: The Influence of Explicitness of Other's Emotion.

Yoshiko KOJIMA

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 問題と目的

対人的相互作用の場において、自分の行為によって相手にネガティブな感情を抱かせた場合、相手の感情をポジティブなものに変えることが、よい関係を維持するために重要であろう。相手の感情にまったく対処しなければ、その人物からネガティブな評価、態度、または反応を向けられる危険がある。

基本感情と呼ばれる感情の中で、嫌悪と怒りは他者の不道徳な行為に対して生じると考えられている (Izard, 1991 莊 巖 (監訳) 1996; Rozin, Haidt, & McCauley, 2008)。例えば Gross & Levenson (1995) では、弱い者いじめをする警官を写したフィルムを見た参加者は、嫌悪と怒りを同程度に強く感じていた。ただし、これらの感情を抱いたときに取ると思われる典型的な行動は、嫌悪と怒りでは異なる。Wallbott & Scherer (1988) によると、嫌悪を感じた場合によく見られる言語的反応は「話さない」であり、逆に怒りの場合は話をしたり声の質を変えるといった能動的な反応が多い。また、嫌悪を感じたときは怒りを感じたときと比べて、(状況を改善するために)何か行動を起こす必要があるとは考えていない参加者や、何も起こらなかったふりをすると答える参加者が多かった (Wallbott & Scherer, 1988)。すなわち、嫌悪を感じたときの反応は、怒りと比べて回避的で、あまり外在化されないと考えられる。したがって、他者に嫌悪を感じさせた場合、その他者から直接的な攻撃を受けないことの方が多いただろう。しかし、Izard (1991 莊 巖 (監訳) 1996) や Rozin ら (1999) が主張するように、嫌悪を引き起こした人物は、嫌悪を感じている人物から拒絶され、排除される危険性がある。したがって、他

者に嫌悪を感じさせた場合は、それに対処する行動をとることが、怒りを感じさせた場合と同様に重要である。そして他者とのよりよい関係を維持する上では、相手の反応がわかりにくい嫌悪はとりわけ配慮の必要な感情であると考えられる。

以上のように、対人関係の調整において重要な役割を果たすと考えられる嫌悪であるが、注目されるようになったのは1990年代以降である (Rozin ら, 2008参照)。さらに、多くの研究は、嫌悪を感じている人物に焦点を当てており (例えば、Stevenson, Oaten, Case, Repacholi, & Wagland, 2010; 高田, 2010; Wheatley & Haidt, 2005)、嫌悪を表出された側の反応に注目した研究はほとんどない。

なお、これまでも様々な研究者が他者のネガティブな感情に対する幼児の対処を調べてきた (e.g., Bernzweig, Eisenberg, & Fabes, 1993; Fabes, Eisenberg, McCormick, & Wilson, 1988; McCoy & Masters, 1985)。これらの研究の結果より、就学前児でも他者のネガティブな感情を取り除くような方略を持っていることが明らかになっている。また、自分が他者の感情 (特にネガティブな感情) を変える担い手になりたいという動機も持っている (Carlson, Felleman, & Masters, 1983)。ただしこれらの研究では、参加者は、変化させようとする感情の喚起とは関係のない、第三者の立場から状況を見ていた。対人関係の維持という観点から考えると、その感情を喚起した当事者が対処することの方がより重要だろう。

以上より、小嶋 (2001b) は、相互作用の相手に嫌悪を感じさせた場合の対処方略について、幼稚園・保育所の年中児と年長児において検討した。

小嶋 (2001b) では、実験を2つ実施した。その結果、

いずれの実験においても、年中児も他者のネガティブな感情をポジティブなものに変えるような対処方略がある程度は知っていること、自分の行為によって他者に嫌悪を感じさせた場合は、感情をポジティブにする対処方略をとるべきであると考えることが示された。ただし実験1では、年中児は年長児に比べて、相互作用の相手を見捨てたり、問題を回避するような対処を回答する傾向が強かった。他方、実験2では学年差はみられず、ほとんどの回答が他者の嫌悪を取り除き、ポジティブな感情に変えるようなものであった。小嶋(2001b)は、実験1と2の違いについて、嫌悪を言葉で明確に示したことが原因ではないかと推測している。対処のターゲットとなる人物の感情をラベリングすることによって、向社会的対処が促される可能性は、Denham, Mason, & Couchoud (1995) においても示されている。また、被害者の感情を推測させると、加害者が罪悪感を認識し、違反を繰り返さないと回答する割合が高くなる(中川・山崎, 2005)。これらの研究結果は、小嶋(2001b)の推測と一致する。

ただし、小嶋(2001b)では、嫌悪を喚起した行為の意図性を統制していなかったため、この影響も否定できない。そこで本研究は、行為の意図性を統制し、感情を明確に示すことが回答する対処方略に及ぼす影響を検討する。

## 方法

**参加者** 参加者は地方都市 H 市の幼稚園、保育所に通う年中児54名と年長児40名、および、地方都市 A 市の幼稚園に通う年中児19名と年長児19名であった。このうち、H 市の年中児、年長児は、小嶋(2001b)の実験1の参加者と同じ幼児である。<sup>1</sup>

**物語** 本研究では、小嶋(2001b)の実験1の2つの嫌悪物語を利用した。これらの物語では、一方の登場人物(「行為者」)の不道徳な行為によって、もう一方の登場人物(「受け手」)が嫌悪を抱く。小嶋(2001b)の実験1の物語においては、「受け手」の嫌悪が、行動によって示されていた(以下、これらの嫌悪物語を行動版と呼ぶ)。行動版の物語を基に、「受け手」の嫌悪を行動ではなく言葉で示す物語も2つ作成した(以下、言語版と呼ぶ)。以上の4つの物語を本研究では用いた。物語の内容を Table 1 に示した。各物語に、男性用(登場人物が男児)と女性用(登場人物が女児)がある。

物語は、その内容を表現する3枚(行動版)または2枚(言語版)のカラー図版と朗読を録画した VTR を用いて提示した。行動版の物語では、1, 2枚目の図版には対人的相互作用の様子を、3枚目には、「受け手」の嫌悪を表す行動を示した。言語版では、対人的相互作用の様子を示す図版の2枚目に付加する朗読の最後で、「受け手」が嫌悪を感じていることを述べた。なお、嫌悪物語の行動版において「受け手」が嫌悪を感じて

Table 1  
物語の内容

積み木: 「受け手」は積み木で遊んでいた。 「行為者」がやってきて、「受け手」の使っていた積み木を取って行った。 「受け手」は積み木遊びをやめた(行動版)。 「受け手」はすごくいやだなと思った(言語版)。
基地: 「行為者」は基地を作っていた。「受け手」も基地を作りたかったので入れてと言ったが、「行為者」はダメと言った。 「受け手」は手をぎゅっと握りしめて下を向いた(行動版)。 「受け手」はすごくいやだなと思った(言語版)。

いることは、年中児でもほぼ100%推測できる(小嶋, 2001a 参照)。

また、「行為者」が常に意地悪なことをすることもであるという印象を参加者に与えないようにするために、「受け手」が嬉しさを感じる物語も作成した(以下、嬉しさ物語と呼ぶ)。

**手続き** 実験は個別に行った。H 市の年中児の一部と年長児では、平成10年8月から9月にかけて、残りの年中児では平成11年1月に実験を行った。A 市の参加者では、平成14年2月から3月にかけて実験を行った。

最初に「行為者」の絵を参加者に見せ、「この子は[行為者]と言います。〇〇ちゃん(〇〇くん)(参加者の名前)は[行為者]のつもりになってビデオを見てね」と教示した([行為者]には「行為者」の名前が入る)。「行為者」の絵は、常に参加者に見えるところに提示しておいた。つぎに、H 市の幼稚園・保育所の年中児・年長児には行動版の物語を、A 市の幼稚園の年中児・年長児には言語版の物語を1つずつ VTR で提示した(行動版の場合は、4インチ(Victor GR-DVL)、言語版の場合は3.5インチ(SONY DCR-TRV17K)のモニターに提示した)。提示順序は参加者間でカウンター・バランスを取った。物語ごとに最後の図版で VTR を静止し、「もし〇〇ちゃん(〇〇くん)(参加者の名前)が[行為者]だったら、この後どうする」と「行為者」の立場をとるように促し、その対処方略について尋ねた。<sup>2</sup>

自発的な回答がない場合は、各場面に対応した向社会的対処、反社会的対処、非社会的対処をカラー図版で示した。3種の対処方略図版は Blechman, Prinz, & Dumas (1995) を参考に設定した。Blechman によると、向社会的対処とは、他者と自己の両方にとって望ましい結果となるように配慮した行為である。反社会的対処とは、自己の満足への配慮を優先した行為で、他者に対する攻撃的な行為を含む。そして非社会的対処は不愉快な状況から逃れようとする行為で、他者を無視したり、問題となる状況から回避するような行為

Table 2  
各物語に用意した対処方略の選択肢の内容

物語名	対処方略	内容
積み木	向社会的	「行為者」は「受け手」に「一緒に作ろう」と言った。
	反社会的	「行為者」は「受け手」に「邪魔だよ、あっちへ行って」と言った。
	非社会的	「行為者」は「受け手」のことは気にせず、一人で基地作りを続けた。
基地	向社会的	「行為者」は「受け手」に「ごめんね」と言って積み木を返した。
	反社会的	「行為者」は「受け手」の作っていた家を壊し、もう1つ積み木を取った。
	非社会的	「行為者」は「受け手」のことは気にせず、一人で積み木遊びを続けた。

注) 選択肢は行動版と言語版に共通して用いた。

を含む。それぞれの物語に対して用意した対処方略の内容を Table 2 に記載した。実験者は各対処の内容を説明しながら、3枚の図版をランダムな順番で参加者の前に並べ、その中から選択させた。また、参加者が物語を理解しているかどうかを確認するため、それぞれの物語において、物語の内容の再生を求めた。

### 結果

行動版を見た年中児48名(平均年齢(SD)は5.04(0.37)歳)、年長児37名(平均年齢(SD)は5.91(0.26)歳)、および、言語版を見た年中児19名(平均年齢(SD)は5.43(0.28)歳)、年長児19名(平均年齢(SD)は6.45(0.27)歳)のデータに基づき、以下の分析を行った。この他の参加者は、物語の内容を十分に再生できなかったため、そのデータを分析の対象から外した(全て、行動版を見た参加者であった)。また、嬉しさ物語は、「行為者」が意地悪なことをすることもだという印象を与えないために挿入したものであるため、分析の対象としなかった。なお以下の分析では、有意水準を5%とした。

**自発回答の割合** 各物語における学年別の自発回答の割合を Table 3 に示した。この表を見ると、行動版よりも言語版での割合が高くなっている。

しかし、参加者の年齢に基づき、学年(2)×物語の種類(2)の2要因分散分析(いずれも参加者間要因。以下同様)を行ったところ、学年の主効果だけでなく、

Table 3  
各物語における自発回答の割合(パーセント)

学年	物語の種類	物語名	
		積み木	基地
年中	行動版(n = 48)	52 (25)	58 (28)
	言語版(n = 19)	74 (14)	89 (17)
年長	行動版(n = 37)	68 (25)	65 (24)
	言語版(n = 19)	79 (15)	79 (15)

注) カッコ内の数値は人数。

物語の種類の主効果も有意であった( $F_s(1, 119) = 231.90, 57.35$ )。そこで、自発回答であるかどうかを目的変数、年齢、学年、物語の種類を説明変数とする多重ロジスティック回帰分析を行った。分析にはデータ解析ソフト R version 2.10.1 を用いた(以下の多重ロジスティック回帰分析も同様)。Table 4 に分析結果をまとめた。

まず、積み木と基地のそれぞれにおいて、年齢、学年、物語の種類を説明変数とするモデルの有意性を確認したところ、Table 4 の上部に示したように、積み木では10%水準で有意であったが、基地の場合は、有意でなかった。

物語の種類によって自発回答の割合が異なるかどうかを確かめることがこの分析の主眼であるので、学年を説明変数から除いた多重ロジスティック回帰分析を行った。その結果、Table 4 の下部にあるように、積み

Table 4  
自発回答か否かを目的変数とした多重ロジスティック回帰分析の結果

説明変数	積み木				基地			
	B	EXP(B)	SE	Wald	B	EXP(B)	SE	Wald
年齢	0.08	1.09	0.05	1.63	0.56	1.75	0.54	1.05
学年	-0.14	0.87	0.67	-0.22	0.05	1.06	0.05	1.04
物語の種類	-0.07	0.94	0.50	-0.13	-0.38	0.69	0.69	-0.55
尤度比検定の結果(df)	7.65 (3) +				5.30 (3)			
年齢	0.07	1.08	0.03	2.50*	0.03	1.03	0.03	1.04
物語の種類	-0.02	0.98	0.45	-0.04	0.68	1.98	0.49	1.40
尤度比検定の結果(df)	7.60 (2) *				5.00 (2) +			

+ $p < .10$ , \* $p < .05$ 。

木ではモデルが有意であった（正分類率65%）。係数をみると、年齢は有意であったが、物語の種類は有意ではなかった。基地の場合は、モデルは10%水準で有意であったが（正分類率67%）、いずれの係数も有意ではなかった。

**対処方略** まず、自発回答を向社会的対処、反社会的対処、非社会的対処に、2名で分類した。一致率は92%、分類が一致しなかった回答については、話し合いにより決定した。3種の対処方略に分類できなかった回答が4つあった。

次に、自発回答に基づき、各対処方略の回答数を求めた。たとえば、積み木と基地の両方で向社会的対処を自発的に回答していれば向社会的対処の回答数2となる。積み木と基地のいずれか一方で向社会的対処を回答し、残りの物語ではその他の対処方略を回答したり、自発回答がなかったりした場合は、向社会的対処の回答数1となる。学年別、物語の種類別の各対処方略の平均回答数とSDをTable 5の左側に示した。また、自発回答と選択回答を合わせた各対処方略の回答数も求めた。この場合は、例えば、Table 2に示した選択肢から向社会的対処を選択した場合も、向社会的対処を回答したとみなす（反社会的対処、非社会的対処についても同様）。Table 5の右側に、自発回答と選択回答を合わせた場合の平均値とSDを載せた。

前述のように、行動版を見た参加者と言語版を見た参加者の年齢差は有意であった。そこで、年齢を共変量とする学年(2)×物語の種類(2)の共分散分析を、Table 5に示した平均回答数に基づき、対処方略別に行った。

平行性の検定の結果、年齢と他の要因との交互作用は有意ではなかった。次に、年齢の回帰係数をみると、向社会的対処の回答数に関しては、自発回答のみの場合も自発回答と選択回答を合わせた場合も、回帰係数はそれぞれ-0.01、-0.02で、有意ではなかった( $t_s(118) = -0.59, -1.62$ )。また、自発回答と選択回答を合わせた場合の、反社会的対処の回答数と非社会的対処の回答数においても、年齢の回帰係数は有意でなかった(係数の値はいずれも0.01,  $t_s(118) = 0.86, 0.87$ )。そこで、これらの回答数に対しては、学年(2)×物語の種類(2)の2要因分散分析を行った。

自発回答に基づき算出された反社会的対処の回答数

と非社会的対処の回答数においては、年齢の回帰係数が有意であった(係数の値は0.01, 0.02,  $t_s(118) = 2.22, 2.21$ )。したがって、これらの回答数に対しては年齢を共変量とする共分散分析を実施した。なお、共分散分析と分散分析には、SPSS 12.0J for Windowsを用いた。

以上の分析の結果、向社会的対処においては、自発回答のみの場合も、自発回答と選択回答を合わせた場合も、物語の種類の主効果のみが有意であった( $F_s(1, 119) = 12.14, 8.38$ )。非社会的対処においては、自発回答のみの場合は、学年の主効果と物語の種類的主効果が有意であった( $F_s(1, 118) = 4.15, 8.63$ )。自発回答と選択回答を合わせた場合、物語の種類的主効果が有意で( $F(1, 119) = 6.11$ )、さらに、学年と物語の種類との交互作用に有意な傾向がみられた( $F(1, 119) = 3.47, p < .10$ )。そこで、5%水準で単純主効果の検定を行ったところ、年中児においては、言語版よりも行動版の方が非社会的対処の回答数が有意に多かった( $F(1, 119) = 9.79$ )。また、行動版において、年中児は年長児よりもこの対処方略の回答数が有意に多かった( $F(1, 119) = 8.08$ )。反社会的対処に関しては、自発回答において、学年と物語の種類の有意味な主効果が見られただけであった( $F_s(1, 118) = 5.46, 4.17$ )。ただし、言語版を見た年長児では、この対処方略を回答する参加者は全くおらず、他の反社会的対処の平均回答数も0との差が有意ではない( $t$ 値は0.48から1.30)。したがって、上記の分析を適用することは不適切であると考えられる。そのため、反社会的対処の回答数に基づいた分析の結果は、以下、参考程度にとどめる。

以上の結果をまとめると、学年に関係なく、言語版では行動版よりも、向社会的対処の回答数が多かった。これに対し非社会的対処の回答数は、行動版の方が言語版よりも多かった。

## 考察

Table 5を見ると、自発回答に基づいて各対処方略の回答数を算出した場合も、選択回答を加えた場合も、学年や物語の種類にかかわらず、向社会的対処の回答数が最も多い。このことから、4から6歳程度の幼児は他者の感情をポジティブなものに変えるような向社会

Table 5  
各対処方略の平均回答数(かっこ内はSD)

学年	物語の種類	自発回答			自発回答+選択回答		
		向社会的	反社会的	非社会的	向社会的	反社会的	非社会的
年中	行動版	0.71 (0.76)	0.08 (0.28)	0.31 (0.55)	1.38 (0.70)	0.10 (0.31)	0.52 (0.61)
	言語版	1.26 (0.64)	0.05 (0.22)	0.05 (0.22)	1.79 (0.41)	0.11 (0.31)	0.11 (0.31)
年長	行動版	0.97 (0.82)	0.05 (0.23)	0.19 (0.39)	1.57 (0.64)	0.11 (0.39)	0.22 (0.41)
	言語版	1.47 (0.75)	0.00 (0.00)	0.11 (0.31)	1.84 (0.36)	0.00 (0.00)	0.16 (0.36)

的対処を知っていると推測される。また、反社会的対処の回答は年中児でもほとんどなかった。したがって、5歳前後の幼児も自己への満足感を優先し、他者に攻撃的な行動を取るべきではないと考えていると言えよう。

「受け手」の嫌悪を言葉で明確に示すことは、多重ロジスティック回帰分析の結果から、対処方略を自発的に回答するかどうかには影響しないと考えられる。しかし、対処方略の内容においては、嫌悪の明確化の影響が見られた。すなわち、学年にかかわらず、嫌悪を言葉で明確に示す方が、行動のみで表現するよりも、望ましい行動がより多かった。言い換えると、嫌悪の明確化は、対処を自らの言葉で説明することは促進しないが、知識として持っている対処方略の中で、自己と他者の両方に配慮し、他者との関係を維持していくような方略を選択するように促す効果があると推測される。

相互作用の相手の感情を明確にすることが、その人物に対するより望ましい行動への言及を促すという本研究の結果は、Denhamら（1995）や中川・山崎（2005）の知見、あるいは、小嶋（2001b）の結果から示唆されることと一致する。また、非社会的対処の回答数をみると、とくに行動版を見た年中児の平均値が高く、自発回答と選択回答を合わせた場合、同じ物語を見た年長児や言語版を見た年中児との差が有意であった。この結果からは、感情を言葉で明確に示すことの効果は、とくに年中児で大きいと考えられる。

ところで、本研究では、「受け手」の嫌悪を喚起する「行為者」の行動の意図は統制していた。したがって、本研究の結果から、小嶋（2001b）の実験1と2で見られた差異は、行為の意図性の明確さによるものではないと言えよう。

以上より、5歳前後の幼児は、嫌悪が対人関係を調整するような対処を促す合図であるということすでに学習しており、他者の嫌悪に気づくことができれば、何らかの補償行動を示して、その感情をポジティブにする対処を回答できると言えよう。すなわち、5歳頃には、嫌悪は Izard（1991） 莊巖（監訳）1996）や Rozinら（1999, 2008）が指摘しているような社会的機能を果たすようになっていることが示唆される。

ただし、本研究では、行動版を見た参加者と言語版を見た参加者の平均年齢や年齢の幅が異なっており、後者の方が平均年齢も年齢層もより高かった。また、実験の実施時期も、行動版の多くの参加者では、年度の半ばよりも早い時期であるのに対して、言語版では年度末の時期であった。

久保（2008）は、幼稚園での生活において、こども自身が怒りを表出する経験や、いざこざの当事者となる経験、いざこざの調停や仲裁をする経験が、怒り表出の機能に対する理解に影響する可能性を示唆してい

る。本研究の分析においては、できる限り年齢の影響を統制するような方法を用いた。しかし、言語版でのパフォーマンスが、久保（2008）が指摘しているような経験をより多く積んでいることによる影響を受けている可能性も否定できない。

また、積み木での回答に基づく多重ロジスティック回帰分析からは、年齢とともに発達する能力が本研究の結果に影響している可能性も示唆される。そのような能力として考えられるものの一つは、自己の知識を言葉で表現する能力であろう。年齢層がより低い参加者群（すなわち、行動版を見た参加者）において物語の内容を再生できなかった幼児がいたことから、この能力の影響がうかがえる。しかし、向社会的対処については、自発回答から算出した回答数に基づく分析の結果と、選択回答を合わせた場合の回答数に基づく分析結果に大きな違いがなかった。したがって、本研究で用いたような状況において回答する対処方略の内容に、言語表現能力が影響を及ぼしていたとしても、その範囲は、全般的ではないと推測される。

以上より、対処のターゲットとなる人物の感情を明確に表すことが、より望ましい対処を促す大きな要因となるのかどうかに関して、そして、嫌悪がそのような機能の強い感情であるのかどうかに関して、より詳細な結論を下すには、上述の経験や能力といった要因の影響を統制した研究を、さらに行う必要があるだろう。

また、本研究では場面想定法を用いていた。したがって、実際の日常場面において、相互作用の相手の嫌悪を明確にすることで、より適切な対処の実行が促されるのかどうかについて検討することも、今後の課題の一つである。

## 引用文献

- Bernzweig, J., Eisenberg, N., & Fabes, R. A. (1993). Children's coping in self- and other-relevant contexts. *Journal of Experimental Child Psychology*, *55*, 208-226.
- Blechman, E. A., Prinz, R. J., & Dumas, J. E. (1995). Coping, competence, and aggression prevention: Part 1. Developmental model. *Applied & Preventive Psychology*, *4*, 211-232.
- Carlson, C. R., Felleman, E. S., Masters, J. C. (1983). Influence of children's emotional states on the recognition of emotion in peers and social motives to change another's emotional state. *Motivation and Emotion*, *7*, 61-79.
- Denham, S. A., Mason, T., & Couchoud, E. A. (1995). Scaffolding young children's prosocial responsiveness: Preschoolers' responses to adult sadness, anger, and pain. *International Journal of Behavioral Development*, *18*, 489-504.
- Fabes, R. A., Eisenberg, N., McCormick, S. E., & Wilson, M. S. (1988). Preschoolers' attributions of the situational determinants of others' naturally occurring emotions. *Developmental Psychology*, *24*, 376-385.
- Gross, J. J., & Levenson, R. W. (1995). Emotion elicitation using films. *Cognition and Emotion*, *9*, 87-108.
- Izard, C. E. (1991). *The psychology of emotions*. New York: Plenum

- Press. (イザード, C. E. 莊巖舜哉 (監訳)・比較発達研究会 (訳)(1996). 感情心理学 ナカニシヤ出版)
- 小嶋佳子 (2001a). 対人的場面におかれた他者の嫌悪を推測する5, 6歳児の能力 心理学研究, **72**, 51-56.
- 小嶋佳子 (2001b). 他者の嫌悪に対処する方略についての幼児の知識 感情心理学研究, **8**, 14-23.
- 久保ゆかり (2008). 怒りの表出機能についての認識の発達——インタビューと参与観察による5歳から6歳にかけての縦断的研究—— 東洋大学社会学部紀要, **45** (2), 99-112.
- McCoy, C. L., & Masters, J. C. (1985). The development of children's strategies for the social control of emotion. *Child Development*, **56**, 1214-1222.
- 中川美和・山崎晃 (2005). 幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響 発達心理学研究, **16**, 165-174.
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. R. (1999). Disgust: The body and soul emotion. In T. Dalgleish & M. J. Power (Eds.), *Handbook of cognition and emotion*. New York: John Wiley & Sons, pp. 429-445.
- Rosin, P., Haidt, J., & McCauley, C. R. (2008). Disgust. In M. Lewis J. M. Haviland-Jones, & L. F. Barrett (eds.), *Handbook of emotions*. 3rd ed. New York: Guilford Press, pp. 756-776.
- Stevenson, R. J., Oaten, M. J., Case, T. I., Repacholi, B. M., & Wagland, P. (2010). Children's response to adult disgust elicitors: development and acquisition. *Developmental Psychology*, **46**, 165-177.
- 高田雅美 (2010). 道徳判断における嫌悪感情の役割 21世紀倫理創成研究 (神戸大学), **3**, 117-128.
- Wallbott, H. G., & Scherer, K. R. (1988). How universal and specific is emotional experience? Evidence from 27 countries on five continents. In K. R. Scherer (Ed.), *Facets of emotion: Recent research*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, pp. 31-56.
- Wheatley, T., & Haidt, J. (2005). Hypnotic disgust makes moral judgments more severe. *Psychological Science*, **16**, 780-784.

## 注

- <sup>1</sup> 本研究は小嶋 (2001b) の実験1に新たなデータを加え、小嶋 (2001b) とは別の観点から分析、検討した。
- <sup>2</sup> 言語版を提示した参加者には、「受け手」が怒りを感じる物語も提示していた。そのため、参加者の負担を考慮し、実験は2日に分けて行った。「受け手」が嫌悪を感じる物語は、各実験日に1つずつ提示した。

## 付記

調査に参加して下さった参加者の皆様、非常にお忙しい時期にご協力いただいた幼稚園、保育所の先生方に、深く感謝いたします。また、回答の分類を快く引き受けて下さった樋口匡貴氏 (現広島大学教育学部心理学系コース准教授) に、ここで感謝の意を表します。

(2010年9月17日受理)